

2011年も暮れようとしている。街はあわただしく、いつもの師走の風景だ。今年最後のうず潮を書くにあたり、やはり「あのこと」に触れないわけにはいかないと思う。一人一人が物語を紡ぎ、それを伝えていく。そのこの意味は大きい。

12月、岩手県陸前高田へ行った。高田は気仙地方と呼ばれ、岩手県の南部にある。高田へは北上から住田を経由して入った。東京から東北新幹線を使って北上駅まで約3時間の行程となる。仙台を過ぎると見慣れた東北の景色が広がった。北上で駅に降りた瞬間、小雪がちらつき始めた。気温はマイナス3度。暖房のよく効いた新幹線の車内から、凍えるような寒さ



やまもと たろう  
山本 太郎

2011年3月11日。あの日も雪が降っていたという。

高田の県立病院では、午後3時32分、病院内の全ての時計が時間を止めた。津波警報が出てから実際に津波が来るまで、わずか数十分しかなかった。自身で動ける患者をまず上階に上げ、次いで、寝たきりの患者を運ぶ。病院の関係者、患者はその夜、病院の屋上で一夜を過ごした。そのなかに、が

思うと、こと切れたという。

その夜、屋上では火がたかれ、津波ですぶぬれになった人々は、順番に暖をとった。体に巻きつけた紙おむつが人々を寒さから救ったという。

それから9カ月。3万枚のカルテを失った県立病院は仮設病院を立ち上げて、確実に地域医療を支え始めていた。

最愛の奥さまを津波で失ったある医師。その医師の一人娘は都市部での研修を一時中止し、後期研修から父の働く病院で行うことに決め、生まれ育った町に帰って来た。1DKの仮設住宅に暮しながら2人は確実に地域の医療を支え始めている。

(長崎大熱帯医学研究所教授)

2011

の外気のなかに出ると、その寒さが、私に「あのとき」、つまり私の記憶は一気に9カ月前に飛んだ。